

# 日本IT書紀

## 106 異色官僚

06 揺籃篇  
卷之十五 氣噴

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第百六

異色官僚

一

さて、平松守彦のことである。

この人物は、通産省の官僚としてIBM社と国産メーカーとの間で電子計算機の技術特許に関するクロスライセンス契約を成立させ、いずれ国産メーカー六社の再編を主導することになる。

国産コンピュータの発展、さらに国内のコンピュータ利用を政策遂行の立場で推進した。書くべきことはたくさんあるのだが、ゆるゆると進めることにする。

一九二四年の三月、大分市に生まれた。

日本経済新聞のコラム「私の履歴書」に平松が登場したのは一九九二年六月一日から一か月、都合二十九回の連載だった。その二回目は

——大分をなぜ「おおい」と読むか。

という問いかけで始まっている。それに続けて平松は、

——「分」は昔「きだ」と読み、きざむの意味。古来地

形が複雑で田んぼが広く細分化されていたので「大分」(おおきだ) というのがもっともらしい説だ。

と答えを披露している。いかにもこの人物らしい。

同じ九州の福岡県直方の近くにも「大分」と書く地名があり、旧穂波郡(現嘉穂郡)にも同名の村があった。直方のほうは「おおぶ」、嘉穂郡の村は「だいぶ」と読む。

漢字の読みとしては「おおぶ」「だいぶ」のほうが素直だが、なるほど平安のむかし「六合満山」と呼ばれた仏教文化が栄えた国東半島を擁する大分県にあつては、風土記の地名が残っていて不思議はない。

筆者が「いかにもこの人物らしい」と述べたのは、平松守彦という人は通産省に勤めていた当時も、大分県知事となつてから以後も、おそらく一貫して同じ視点から何がしかを発想したに違いないと考えているからだ。

その視点とは、「地勢を読む」ということである。

順序が逆になるけれども、平松が大分県知事となつてから推進した一村一品運動のことを語りたい。いや、語るのは当の本人であつて、二〇〇四年四月二十四日午前十時現在、ただいまの筆者は大分市の中心部にほど近い大分県国際交流センターの応接室にいる。連続取材の二日目なのである。

「いや、お待たせしました」

と現われた元知事は、昨夜の疲れなど微塵もなく、とい  
うより八十という年齢を全く感じさせない。幼少のころ病  
弱だったため、剣道で鍛錬した。無論そのこともあるのだ  
ろうが、姿勢というものは体力ばかりでなく精神のありよ  
うを示す。とすれば、堂々たる人生ということになるであ  
らう。

「大分というところはね」

元知事は話し始めた。

「海あり山ありというのは日本のどことも違いはないけ  
れど、何せ地形が複雑で入り組んでいる。このために古来、  
天下に名を轟かしたことがない。せいぜいが大友宗麟ぐら  
いのもので、江戸徳川の時代には小さな藩がいくつもあっ  
た」

「どっちが先か、ニワトリとタマゴみたいだが、とにかく  
大分の人間というのは他人と同じことをやりたがらない  
小さな町や村で別々のことをやる。だから全体としてなか  
なか発展しなかった」

その逆手を取った。

「どうせ別々のことをするんなら、それぞれが日本一に  
なればいい。酒でも団子でも日本一がそろっていれば大分  
県は発展する。そう考えた」

二階堂酒造の麦焼酎に「吉四六」というのがあった。地

元ではそこそこ知られていたが、全国でどうかというとは  
とんど無名に近い。しかも「焼酎」といえば密造酒、どぶ  
ろく、安酒、粗悪品というイメージが強い。戦後闇市で盛  
んに売られたのがいけなかった。

——匂いに癖があつてね……。

よほどの物好きでない限り、敬遠されていた。

「それを東京に出張するたんびに持つていって、会う人  
みんなに飲ませた。役所の幹部や企業のお偉方が、うまい  
と言ってくれた。東京の新橋に大分出身の人が小料理屋を  
開いていてね、そこに置いてもらった。これはいけるぞ、  
と思った」

知事が宣伝マンになった。

「東京に陳情に行つて、道路や橋を作る公共事業予算を  
国からぶん取つてくる。それが知事の仕事だと考えられて  
いましたからね。もちろん必要な事業のためには予算を獲  
得する努力をしたけれど、国の予算に頼つていては地域の  
力は衰えるばかりです。そう考えて、大分県産のモノを  
売り込むのに頑張つたです」

吉四六は麦焼酎の代名詞になった。現在では大分県が焼  
酎の生産量日本一を誇る。

大相撲の優勝力士に大分県産の干し椎茸を贈った。「ド  
ンコ」といえば椎茸の高級品、しかも大分産に限るとい

定評ができた。

豊後海峡で獲れる鯖に水揚げの市場がある関漁港の名を取って「関鯖」のブランドを付けた。これを東京や大阪の高級料亭に限定して卸した。同じ海からあがつた鯖でも「関」の名が付くだけで二割、三割の高値で売れる。

「いまでは四国の漁船が入港料を払ってでも関に水揚げにくる。野菜や鮮魚にブランドを付けたのは、たぶん大分が初めてでしょう」

ひなびた温泉地だった湯布院には年間三百五十万人がやってくる。由布岳と温泉のほかは何もないような町で始まった映画祭が若者に受けた。弱点を逆手に取ることができたのは、つまり「地勢」を分析したからにはかならない。

ここでいう「地勢」とは、地形や人口のことではない。

「人」「モノ」「かね」の塩梅、そして「世の中の流れ」「時の勢い」とでもいうものである。

## 二

一九四三年の八月、熊本県立の旧制五高から九州帝国大  
学法文学部に進んだ。東京帝国大学の受験に失敗したのだ  
った。

——来年こそ。

と決意を新たにしたが、戦局が邪魔をした。学徒動員で  
兵役に就かなければならなくなった。「どうせなら」と海  
軍經理学校を受験し、四四年十月から半年を東京・築地の  
勝鬨橋近くで過ごした。

四五年の春、青森県大湊の海軍鎮守府付きとなり、択捉  
島の第五十三警備隊所属となった。六月に主計少尉に任じ  
られ、その直後に発動された「北洋作戦」で島に残留する  
ことになった。八月十四日、機帆船二隻に乗り込んで島を  
撤収し、根室に着いて終戦を知った。

翌四六年四月、晴れて東京帝国大学に入った。このとき  
弟の義郎が一年先に入学していて、兄・弟の立場が逆転し  
た。四八年、在学中に大分市長・上田保の一人娘・先鶴子  
と結婚し、商工省（のち通商産業省）に入ったのは四九年  
だった。

この年に初めて実施された国家公務員試験では、論文章  
式が廃止され「〇×」式になった。そのこともあって、平  
松の成績は商工省採用の枠内に入っていなかった。それを  
のちに通産省事務次官となる佐橋滋が「特許庁採用」とい  
うこととして拾い上げた。

佐橋は城山三郎の小説『官僚たちの夏』の主人公「風越  
信吾」のモデルとされる。相手が大臣だろうが国会議員だ  
ろうが齒に衣を着せないもの言いをする「異色官僚」とし

て有名だった。

その眼鏡に適った平松がのちに大臣、議員の区別なく情報産業の育成を説いて回り、橋本登美三郎をして「先生」といわしめた「異色官僚」になったのは、共通する素地があったからに違いない。

「どういうわけか私には、それまで誰も手がけていないこと、新しいことを次から次に割り振られましてね」

東大法学部から商工省であれば、世間では「エリート」だが、エリート集団の中に入れば話が違ってくる。既存の部局には試験成績がよかった者が配属され、平松のような落ちこぼれが重要部局に回されることはまずない。ただし、このことが幸いした。

繊維局綿業課を振り出しに企業局調査課、工業立地指導室を経て、電子工業課と産業施設課で課長補佐、産業公害課、石油計画課、電子政策課、基礎産業局総務課で課長。国土庁が発足した七四年六月、初代長官で大分県出身の西村英一が「是非にも」と要請して同庁地方振興局審議官として出向し、七五年地元有志の強い招聘で大分県に戻り副知事、七九年知事となった。

この経歴からだけでは、平松守彦という人がなにゆえにあれほどまでに国産電子計算機産業の育成・振興に尽力したか、あるいは育成・振興を成しえたかという理由は見え

てこない。

それを訊ねると、元知事はしばらく考えて、「ヒラから課長補佐までの間に積んだ経験があったから」と言った。

企業局調査課のとき、産業施設課の仕事を手伝った。工場が地下水を汲み上げるため、あちこちで地盤沈下の問題が起こっていた。工業用水道を整備するため補助金制度を創設しようという。その原資を確保するには説明資料がなければならぬ。

平松は東京・代々木にあった日本製鉄の寮に泊り込み、関係者から話を聞いて二日間で膨大な資料をまとめ、次いで政府・自民党、財界向けのパンフレット「工業用水の現状と問題点」を作った。

「これが好評だった。通産省の中でも工業用水の専門家みたいに思われ、企業から『平松技官殿』なんて書いた手紙までもらうことになった。われながら、ついに事務屋が技術屋になったか、と苦笑したもんです」

この仕事が終わって産業界の立地問題や工場施設の整備に精通した平松は、五七年の七月、アメリカを視察することになった。日本生産性本部が主催した視察団に参加したのである。

「アメリカの工場は芝生に囲まれていて、まるで公園の

ような感じだった。インダストリアル・パークという言葉  
を初めて知った。日本にもこういう工場を作らんといかん  
と思った」

産業公害課のとき、工場建設の前に大気や人の健康への  
影響を事前に調査する制度を創設したり、工場地帯と生活  
の場を分離する計画的工場立地を推進する原動力となった。  
このとき地元の人から、

「もしあんたが公害をうまく解決せんかったら、大分に  
は二度と帰ってこれんよ」

と言われた。むろん、そう言った人は平松が大分県知事  
になると考えていたわけではあるまい。

知事として別府湾や国東半島に工場を誘致した際、その  
言葉が蘇った。

石油計画課のときには民族系石油会社の再編を推進して  
いる。日本鉱業、アジア石油、東亜石油の販売部門を一本  
化した共同石油が発足した。このときの経験が、いずれ国  
産電子計算機メーカー再編のとき発揮される。

もう一つ、この人物を語るとき忘れることができないの  
は、国際的な動きと国内産業を複眼で観察する視点という  
ものである。おそらくそれは五七年のアメリカ視察、工場  
立地問題、民族系石油販売会社の設立といった幾つかの経  
験の複合として形成されたものであろう。

国産電子計算機メーカーの育成・振興に尽力したことを  
もって、国粋主義的な思想の持ち主であるとすることは、  
明らかに間違っている。

「私は日本人だから、何よりも先に日本のことを考える。  
しかし日本だけのことを考えていては、二進も三進も行か  
なくなる。日本の自立と国際的な協調、さらに自由経済の  
発展をいかに折り合わせるか、そこが難しい」

ではIBM社が日本のメーカーに基本特許契約を結ぶよ  
う求めてきた一九六〇年（前節「クロスライセンス」参  
照）、平松はどのように考えたのか。

### 三

平松は三十六歳、電子工業課の課長補佐だった。

IBM社が突きつけてきた基本特許契約の要求は難問に  
は違いなかった。国産メーカーが個別にIBM社と交渉し  
ても個別に撃破され、国産電子計算機の夢は木っ端微塵に  
なってしまう。ということは電子工業そのものが壊滅する  
危険性すら孕んでいた。

交渉の前面に出ることを決めたとき、平松は考えた。

——IBM社は何を望んでいるのか。  
答えはすぐに分かった。

戦後、日本政府が一貫して国内産業の防波堤としてきた外資規制の緩和と外国為替法の改定である。日本法人である日本IBMは、書類上はIBM社と複数の個人が出資したことになっているが、実質的にはアメリカIBM社の100%出資子会社である。

国内の産業、特に電子計算機メーカーの体力は、資本の自由化に耐えることができるほどには育っていない。関税を自由化し、製造を自由化したら国産メーカーは立ち行かなくなる。

——これは死守。

と決めた。

次の外国為替法の問題だが、内実を調べると要は日本IBMがIBM本社に支払うべき基本特許使用料の問題であることが分かった。外為法が障害になってアメリカIBM社は日本からの送金を受け取ることができないでいた。

——これを容認し、国産メーカーがIBM社の基本技術を使えるようにしたほうがメリットが大きい。日本IBMの工場で電子計算機の生産を始めたいという要求も、制限付きで容認すれば、国産周辺機器メーカーの利益になるのではないか。

そうはいつても、まずは頑迷を装って「NO」を繰り返した。中に立った日本IBM社長・水品浩、同常務・椎名

武雄が板ばさみになった。このとき椎名はたまりかねて、

「ミスター平松のいう通りにしないと、通産省にはもつと強硬論者がいて、日本ワットソン時代から築き上げてきたすべてがご破算になってしまう。お互いに譲歩し合うしかないではないか」

とアメリカ本社に意見を具申したといわれている。

ある程度の地ならしができたところにIBM本社の法務担当副社長ジェームズ・バーゲンシュトゥックが来日した。

一行が宿泊したのは、東京・赤坂のホテル・ニュージャパンドだった。

「折から日米安保問題で国会周辺は騒然としていました。学生と警官隊がにらみあっているその隣で、最後の交渉が始まったわけです」

平松はいう。

「バーゲンシュトゥックは銀髪の背の高い紳士でね。ちょっと見は学者のようだった。ところが交渉が始まるとなかなか頑固で、秘密が漏れるということを理由に絶対に通訳を入れなかった。わたしは英語がロクに話せなくてね。辞書を片手に筆談になったり、身振り手振りでお互いの主張を理解しようと努めました。最後のほうになると、ホテルに入るのもイヤになったものですよ」

最後まで平行線をたどったのはIBM社に支払うロイヤ

リテイの率だった。

バーゲンシュトゥックは日本メーカーがアメリカIBM社に支払うロイヤリティを七%とすることを提案した。契約では一〇%だから、三%を譲歩したかたちだった。対して平松はさらに値下げを要求した。

それではというのでバーゲンシュトゥックは、「小型コンピュータIBM1401の国内製造を認めてほしい」

という要求を持ち出した。

国内で周辺機器を作りたいという要求は以前から水品が示していた。それを可とすることを交換条件として、クロスライセンス交渉はスターとした。計算機本体となると話が違った。

交渉の成り行きについて平松から逐一報告を受けていた重工業局長・佐橋滋は、電子計算機本体を生産したいという要求を条件付きで受け入れるしかない、と聞いて、

——烈火のごとく怒った。

ということになっている。

あるいはそれは国産メーカーへの配慮から出た演技だったのか、平松あたりが作った脚本であるかもしれない。

ロイヤリティの料率と国内生産の問題が平行線をたどるうち、とうとうバーゲンシュトゥックが日本を離れる八月三

十一日がやってきた。

当日の朝、バーゲンシュトゥックが離日の挨拶のため通産省を訪ねたとき、佐橋が言った。

「あなたには根負けしました。IBM社の要望を受け入れましょう」

バーゲンシュトゥックはわが耳を疑った。

相手が口にした言葉の意味を理解するのにしばらく時間が必要だった。

「あなたは、いい部下をお持ちになった」

笑顔がこぼれた。

バーゲンシュトゥックはその場で航空機のチケットをキャンセルし、記者会見の準備に取りかかった。

IBM社は日本の壁に風穴を開けることができたといに喜んだ。

通産省はIBM社の要求に屈したかたちだったが、

——われわれは実を取った。

と佐橋たちは考えていた。

平松は言う。

「一つは国産メーカーが世界に出て行くことができる基礎的な条件をクリアした。もう一つは自由化の波がいきなり押し寄せる前に、必要な手を打つことができた。粘り勝ちだった」

基本特許に関する契約は十年おきに更新されることになっていった。七〇年の交渉でも平松は電子政策課課長としてバーゲンシュトゥックと再びあいまみえた。

さらに十年後の一九八〇年、大分県知事になっていた平松のもとに、バーゲンシュトゥックから一通の手紙が届いた。バーゲンシュトゥックはこの年、IBM社をリタイアし、かつての知己にそのことを知らせたのである。

その手紙にはこうあった。

——双方ともにタフなネゴシエータでした。あれは日本の業界にとっても、日本IBMにとっても、とてもいい解決策でした。

## 補注

国東半島 豊後水道に大きく張り出したほぼ半円形の半島を指す。「東」を「さき」と読むのはむろん当て字であつて、「国の先（先端）にある」という地理的な意味から付けられた。しかし「国の先」が東であるということは、どこから見た東か、ということが問われる。大分市や別府市ではあり得ない。そこで考えられるのは九州北半を一つの国として見たとき、まさに国東半島が瀬戸内海に向かう「東の先」だったことになる。福岡県八女市（磐井王墓がある）付近を拠点にしていたと考えられる「筑紫の君」の領域に属していた時代の名残であろう。

風土記の地名 『豊後風土記』逸文。景行天皇がこの地を訪れたとき「広大なる哉、この郡は。よろしく硯田国（おおきた）と名づくべし」とし、これがのちに「大分」と書かれるようになったといわれている。別の説として「多く分かれる」が語源ともいう。大分県国際交流センター 大分県、県内五十八市町村、十商工会議所、大分県商工会議所連合会、大分県中小企業団体中央会、大分県経営者協会、大分県経済同友会など九機関の出資で一九九八年七月に設立された。同センターのホームページには「大分県の民間の中核的な国際交流・協力機関として、草の根交流を促進し、また県民と外国人との相互理解と友好の増進を図り、国際化時代に対応しうる人材の育成と大分県の国際化を推進することを目的としています」とある。平松氏は二〇〇四年六月、理事長を退任し顧問に就任した。

大友宗麟 おおとも・そうりん／1530～1587。大友義鑑

の長子。元服して「義鎮」と名乗った。一五五〇年「二階堂崩れ」と呼ばれるお家騒動で父・義鑑が殺害されると、謀反した家臣を討ち家督を継いだ。翌年、長く抗争してきた大内義隆が陶晴賢のために殺害されると弟・晴英を送り込んで大内氏の家督を襲い、豊前、筑前の二か国にまたがる大名となった。キリシタン大名としても知られ、早くから鉄砲を活用したことで知られる。ただし戦国大名としては薩摩の島津氏との抗争に縛られ、天下をねらうことができなかった。大友氏はのち豊臣秀吉によって改易され家は途絶えた。

江戸の小藩分立 江戸期の大分県域には中津、杵築、日出、府内（大分）、臼杵、佐伯、岡（竹田）、森（玖珠）の八藩が分立、さらに肥後、延岡、島原各藩の飛び領が入り乱れ、加えて日田に代官役所が置かれ九州の幕府領を管轄した。

吉四六 きつちよむ・大分県地方の昔話に登場する気の優しい男の名。中国・道教の流れを汲む説話に「橘中之楽」というのがある。橘の実（長寿・吉兆の徴とされた）の中でふたりの老人（仙人）が向い合つて将棋を指し、いかにも楽しそうだったという昔話で、「橘中」の音が「きつちよ」、「楽」が「ロク」に転じ漢字の「六」で表記された。高知の民話にも「いっちきちちもんちきちきちきちきちきちちよむさん」という早口言葉が出てくる。意味は「行つたばかりで帰つてきたのは吉四六さん」。

北洋作戦 一九四五年七月、大本営は本土決戦のため千島列島の択捉、国後、歯舞、色丹に配備されていた陸軍守備隊を青森県大湊に引き揚げる命令を出した。事実上の撤退だったが「転進」「転出」と称し、作戦の名のもとで撤兵が実施された。

平松義郎 ひらまつ・よしろう／1924～1984。のち名古屋

屋大学法学部長、ハーバード大学客員教授となった。

上田 保 うえだ・たもつ／1896～1980。大分市に生まれ法政大学を出て弁護士となった。第二次大戦中、東京から大分市に疎開し、戦後間もなく市長となった。県庁前に片側三車線（計六車線）の道路を建設し、増えすぎて農作物を荒らすようになった高崎山の猿を餌付けして観光資源とするなどユニークな施策を講じた。大分市長を四期十六年勤め、その退職金と私財をもって高崎山前の埋立地に回遊式水族館を建設した。ローマ法王から聖グレオリオ勲章を受けたキリスト者でもあった。火野葦平の小説『ただいま零匹』のモデルでもある。

西村英一 にしむら・えいいち／1897～1987。大分県に生まれ一九二四年東北帝国大学を出て鉄道省に入った。四八年運輸省鉄道総局電気局長を辞し、四九年の総選挙で当選、六二年池田内閣で厚生相、六六年佐藤内閣で建設相、七一年二度目の建設相を経て七四年田中内閣で国土庁長官、七六年福田内閣で行政管  
理庁長官を歴任した。

地元の人からの忠告 大分新聞社刊『平松県政四半世紀』による。

共同石油 一九六五年に設立され、日本鉱業、東亜石油、富士石油の石油販売部門を統合した。のち、東亜石油、富士石油が離れ、日本鉱業が吸収、「ジャパンエナジー」に社名を変更した。

ンシユトツク James Warren Birkenstock／1912～没年未詳・一九四七年磁気テープの開発に従事し、朝鮮戦争におけるIBM社PCSによる情報処理に関与したのちIBM701の開発、SAGEプロジェクト、IBM702などPCSから電子計算機への過渡期にエンジニアとして過ごした。スペリーランド社との基本特許問題ののち、副社長として日本の電子機器メーカーとの

クロスライセンス契約を取り仕切った (An Interview with JAMES BIRKENSTOCK / 12 August 1980 Stanford, Conn. による)

ホテル・ニュージャパン 一九三六年の二・二六事件で決起将校が本営と定めた料亭「幸楽」の跡地に、実業家・横井英樹が立てた超高級ホテル。帝国ホテルと並び外国要人が多く宿泊することで知られた。一九八二年二月八日未明、宿泊していたイギリス人男性の部屋から出火、死者三十三人、重軽傷者三十四人を出し事実上倒産した。

# 日本IT書紀 106 異色官僚

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。